アンリ・ラブルーストのイタリア時代のデッサン　－アッシジのサン・フランチェスコ聖堂の描写に見られる細い柱と石造天井－

Dessins drawn by Henri Labrouste during his stay in Italy －Slender columns and stone ceiling found in his drawings of the Basilica of San Francesco in Assisi－

白鳥　洋子
SHIRATORI Yoko

キーワード：アンリ・ラブルースト、19 世紀の建築、デッサン、イタリア、サン・フランチェスコ聖堂、細い柱、石造天井、水平力の分離
Keywords：Henri Labrouste, architecture in the Nineteenth century, dessins, Italy, Basilica of San Francesco, slender columns, stone ceiling, separation of the horizontal force.

Henri Labrouste stayed in Italy for five years from 1825 as a scholarship student at the French Academy in Rome. In this article, I analyzed the Italian cities he visited and clarified the characteristic of his research from there. Next, taking the Basilica of San Francesco in Assisi as an example of his drawing in the Italian days, I analyzed the details and revealed a part of his perspective on Italian architecture.

１．はじめに

ピエール＝フランソワ＝アンリ・ラブルースト（Pierre-François-Henri Labrouste, 1801-1875）は代表作品サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館（Bibliothèque Sainte-Geneviève, 1838-1850）、パリ国立図書館（Bibliothèque nationale, 1854-1875）で知られる。両図書館は、記念碑的な公共建築に鉄構造が露出の状態で使用された早期の事例としてその意義が認められている。近代建築史においては、彼と彼の作品に鉄構造の新たな展開への貢献、技術的先駆性に価値を認める見解が一般的であり、西洋建築の芸術意匠の系譜においては、彼は 19 世紀フランスの狭義の古典主義に対して、幅広い表現を許容するロマン主義を確立し、同時に建築の合理的な潮流を新たに築いた人物とされる[1]。

彼の建築の特徴の一つに細い独立柱の空間が挙げられ、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の大閲覧室では中央軸上に細い鉄構造の独立柱が配置されている。パリ国立図書館の大閲覧室においても細い鉄構造の独立柱は正方形のグリット上に規則的に配置され、どちらの柱配置も伝統的な西洋建築においては稀な構成である。先の論文「中世シテ宮殿のグランド・サルにおける独立柱の空間：その空間の消失と 19 世紀の再発見」[2]では、旧シテ宮殿（Palais de la Cité）のグランド・サル（Grande Salle, Grand'Salle）[3]が同様の中央軸に独立柱が配置された構成であったことに着目し、その創設と火災の被害、改修、消失の経緯を概観し、18、19 世紀の建築研究書と芸術作品における同サルの再発見について年譜的に検証を行った。同サルの改修や研究はラブルーストと近しい間柄の高名な建築家、研究者によって行われ、19 世紀における建築、芸術における同サルの価値の高さを明らかにした。同時に 19 世紀の絵画資料、建築図版から同サルの様相を明らかにし、同サルの細い独立柱による透過性のある空間的な魅力と軽快な構造の仕組みとの関係性について論じた。

ラブルーストは在ローマ・フランス・アカデミーの留学生（Académie de France à Rome）として、1825 年から５年間にわたりイタリアに滞在し、その際に数多くのイタリアの都市と建築を訪ね、膨大な数のデッサンを残している。ラブルーストの先駆的な発想と新鮮な芸術意匠の源流はこの時代に培われたと考えられ、本稿では、ラブルーストのイタリア時代のデッサンに着目し、彼の訪れたイタリア都市の概略を把握し、彼の探究の特徴と傾向を明らかにする。次に、彼のデッサンの一例としてアッシジのサン・フランチェスコ聖堂を取り上げ、同聖堂の特徴と照らし合わせながら、彼が描いたモチーフに焦点を当て、彼のイタリア時代の建築への視座と細い柱への探究の一端を明らかにすることを目的とする。

２．ラブルーストのイタリア時代のデッサン

２－１．ローマへの出発とヴィラ・メディチ滞在

アンリ・ラブルーストは 1824 年のローマ大賞コンクール「最高裁判所（Cour de cassation）」で優勝し、1825 年から５年間、在ローマ・フランス・アカデミーの留学生としてローマを中心にイタリアに滞在し、研究制作活動を行なった。ラブルーストの旅の日記によると、パリの出発は 1824 年 11 月 22 日、ローマへの到着は 1825 年１月６日である[4]。移動は馬車であった。帰国は 1830 年５月頃であり、彼がローマからフランスに帰国した際のパスポートには 1830 年５月 14 日と記されている[5]。1830 年は６年目になるので、厳密には彼は５年と５ヶ月間、イタリアに滞在したことになる。

建築、絵画、彫刻、音楽の各部門のローマ大賞受賞者はフランス政府の奨学金を受け、優遇された環境の下に５年間イタリアで研究制作活動を行った。彼らは在ローマ・フランス・アカデミーが所在するヴィラ・メディチ（Villa Médicis, Medici）に滞在した。同アカデミーは 1803 年に同ヴィラに移動し、19 世紀のローマ大賞受賞者はここに滞在した。在ローマ・フランス・アカデミーは 1666 年にジャン＝バティスト・コルベール（Jean-Baptiste Colbert, 1619-1683）によって設立され、当初はサントノフリオ（Sant'Onofrio）修道院近くの建物にあり、1673 年にヴィドーニ・カファレッリ宮（Palazzo Vidoni Caffarelli）に移り、1684 年にカプラニカ宮殿（Palazzo Capranica）に移動し

た。1725年にマンチーニ宮殿（Palazzo Mancini）に移動し、師匠たちの世代や18世紀の建築家、芸術家はマンチーニ宮殿で過ごした[6]。

ヴィラ・メディチはボルゲーゼ公園（Villa Borghese）の外れ、ローマ市街を一望するピンチョの丘の上に建っている。同ヴィラは16世紀のルネサンス期の建築であり、1576年にフェルディナンド1世・デ・メディチ（Ferdinando I de' Medici, 1549-1609）[7]がこの土地を取得してこれを建設し、同ヴィラはローマにおけるメディチ家の拠点としての役割を果たした。設計は建築家バルトロメオ・アンマナーティ（Bartolomeo Ammanati, 1511-1592）であり[8]、外観は壮麗な古代ローマの意匠で纏められている。同ヴィラは現在も彼が描いたデッサン（図1）[9]と変わらない姿で建っていて、現在も19世紀と同様に在ローマ・フランス・アカデミーとして使用され、フランス政府の管轄である。ユネスコ世界遺産に登録されている。

同時期に建築部門ではラブルーストの生涯の仲間となるフェリックス・デュバン（Jacques-Félix Duban, 1797-1870, 1823, c.1824-1829）、ジョセフ＝ルイ・デュク（Joseph-Louis Duc, 1802-1879, 1825, c.1826-1831）、レオン・ヴォードワイエ（Léon Vaudoyer, 1803-1872, 1826, 1826-1832）、実兄テオドール・ラブルースト（Théodore Labrouste, 1799-1885, 1827, 1828-1832）[10]がヴィラ・メディチに滞在していた。当時の同アカデミー長はピエール＝ナルシス・ゲラン（Pierre-Narcisse Guérin, 1774-1833, 1823-1828）、オラス・ヴェルネ（Horace Vernet, 1789-1863, 1829-1834）、ジャン＝オーギュスト＝ドミニク・アングル（Jean-Auguste-Dominique Ingres, 1780-1840, 1835-1840）[11]であった。三者とも19世紀のフランス絵画を代表する芸術家であり、こうした高名な芸術家たちが奨学生たちの研究制作の指導を行なった。

図1：アンリ・ラブルースト、「ヴィラ・メディチ」、1825。

２－２．イタリア時代のデッサンの概要

パリ、ローマ間の移動の旅も含め、ラブルーストは1825年から5年半のイタリア滞在中に数多くの都市と建築を訪ね、膨大な数のデッサンを描いている。彼のデッサンは大変美しく正確であり、色彩仕上げと淡彩仕上げの描写表現の素晴らしさは驚くばかりである。彼はエトルリア、南イタリアのギリシア、ローマの古代から初期キリスト教建築、ロマネスク、ゴシックの建築、アラブ・ノルマン建築、ルネサンスの建築と、各時代の神殿や墳墓、教会や修道院、遺跡や城門など多岐に渡る建築と装飾芸術を描き写している。描かれた建築やその部分の描写からは彼の建築的視点を理解することができ、大変興味深い。

美術史家ロジェ＝アルマン・ウィジェール（Roger-Armand Weigert, 1907-1986）[12]の資料分類を分析すると、ラブルーストは少なくとも144の都市を訪れ、757枚のデッサンを残している[13]。これは既に膨大な量であり、少なくとも1年につき151枚のデッサンを描いていることになる。加えて、未整理のデッサン、他のアーカイヴの所蔵、個人所有、研究成果（envois、オンヴォア、送付）としてパリの芸術アカデミー（Académie des Beaux-Arts）とエコール・デ・ボザール（École des Beaux-Arts）に送付されたデッサンを勘案すると、その数はさらに増えていく。これらの資料からは彼の研究活動、成果の制作が精力的であった様子、彼の建築への情熱とそれを持ち続ける力を理解することができた。

２－３．ラブルーストが訪れた主なイタリアの都市

前述のデッサンの目録からラブルーストが訪れた主なイタリアの都市と地域を分析すると以下のようになる[14]。彼は1824年のパリからローマの移動に当たる時期にミラノ（Milano）を訪れ、イタリア留学の1年目に当たる1825年ではアレッツォ（Arezzo）、アッシジ（Assisi）、ボローニャ（Bologna）、フィレンツェ（Firenze）、フォリーニョ（Foligno）、リヴォルノ（Livorno）、ルッカ（Lucca）、オルヴィエート（Orvieto）、ペルージア（Perugia）、ピサ（Pisa）、シエナ（Siena）、スポレート（Spoleto）、ヴィテルボ（Viterbo）、ヴォルテッラ（Volterra）[15]などを訪れている。これらはトスカーナ地方とウンブリア地方の都市であり、ここからは、彼は1825年にローマを起点にアペニン山脈に沿って進み、両地方の山岳都市を訪れながらフィレンツェに到着し、フィレンツェから比較的近いピサやボローニャへと足を伸ばし、ローマへ戻った様子を理解することができた。

2年目に当たる1826年では、彼はベネヴェント（Benevento）、カプリ島（Isola di Capri）、ナポリ（Napoli）、ポンペイ（Pompeii）、ポッツォーリ（Pozzuoli）、ソレント（Sorrento）などの南イタリアのカンパニア地方の都市を訪れている。特徴としてポンペイの遺跡に関するデッサンが多数描かれていることが挙げられ、103枚が残されている。デッサンを描く時間と労力を勘案すると、彼の古代ポンペイに対する知的探究心は並々ならぬものがあったことを理解できた。加えて、いくつかのデッサンには「マゾワによる（D'après Mazois）」の記載があり、ここからは彼が、ポンペイの遺跡の発掘とその著書『ポンペイの遺跡』[16]で著名なフランソワ・マゾワ（François Mazois, 1783-1826）と交流があった様子を理解することができる。ナポリでは、現ナポリ国立考古学博物館（Museo archeologico nazionale di Napoli）が保管する出土品に関するデッサンを多数描いていて、これも特徴的である。ポッツォーリ、ベネヴェントは良好な状態の古代ローマの遺跡がある街である。

3年目に当たる1827年が記載されたデッサンは少なく、4年目に当たる1828年はアンコーナ（Ancona）、カターニア（Catania）、コリ（Cori）、アグリジェント（Agrigento）、モンレアーレ（Monreale）、パレルモ（Palermo）、セリヌ

ンテ(Selinunte)、セジェスタ(Segesta) など、シチリア島の都市を訪れている。これらは古代ギリシアの遺跡があるマグナ・グラエキアの植民都市である。シチリアの古代ギリシアの神殿に関するデッサンが多数残され、彼の古代ギリシア建築に対する研究意欲の高さが伺えた。このシチリアの研究は1828年にパリのアカデミーに送付した4年目の研究成果である古代ギリシアのパエストゥムの神殿の研究と連動していた様子を理解することができた[17]。

5年目に当たる1829年はタルクイーニア(Tarquinia、旧コルネートCorneto)、フィエゾーレ(Fiesole)、シラクーザ(Siracusa)、ティヴォリ(Tivoli) などであり、特徴としてタルクイーニアの14枚のデッサンが挙げられ、その13枚は古代エトルリアの地下墳墓(ネクロポリ) に関するものであった。この遺跡は1820年代後半においては発掘中の未知の遺跡であり、最新の考古学から古代エトルリアを知ろうとする意欲が感じられる。

6年目に当たる1830年ではリミニ(Rimini)、ヴェネチア(Venezia)、ヴェローナ(Verona) などイタリア北東部のヴェネト州、エミリア=ロマーニャ州のアドリア海沿岸の都市を訪れている。フランスとイタリアの国境を超えたのが5月であることから、残されたイタリア滞在期間を有効に活用し、上記の都市を訪れて建築を見て回った様子を理解することができた。総じて彼は、1825年は中部イタリアのトスカーナ地方とウンブリア地方、1826年は南イタリアのカンパニア地方、1828年はシチリア島、1829年はローマ近郊とその他、1830年はイタリア北東部アドリア海沿岸の都市を訪れたと纏めることができる。

3．デッサンの事例分析：サン・フランチェスコ聖堂

3－1．デッサンのモチーフと同聖堂の特徴

彼は膨大な数のデッサンを残しているのであるが、ここでは事例分析として、1825年のトスカーナ地方のアッシジのサン・フランチェスコ聖堂(Basilica di San Francesco, 1228-1253) のデッサンを取り上げる。彼のサン・フランチェスコ聖堂のデッサンは描写表現が大変美しいことが著名である。サン・フランチェスコ聖堂については7枚のデッサンが残されており、全体の眺め(図2)、上堂のアーチとヴォールト、フレスコの詳細(図3)、フレスコの詳細 (図8)、メダイヨン(Médaillon)[18]のモチーフ、聖職者席(stalles)、中庭回廊(cloître) などが描かれている。そのいくつかは大変美しい色彩仕上げで描かれている。

彼のデッサンにはアーチ、ヴォールト、付け柱、フレスコ、メダイヨンなど建築の部分詳細とその装飾芸術、聖職者席など内部が描かれており、そこにその特徴を見出すことができた。ここからは彼の興味が建築や装飾芸術の部分や詳細に向いていた様子を理解することができた。これはラブルーストを鉄構造の先駆者と捉える近代建築史の観点からは意外なことであったが、一方で、後の彼の代表作品の二つの図書館の装飾芸術における芸術的表現の高さと思慮の深さを勘案すると、納得のいくことでもあった。次の特徴は平面図や断面図を描いていないことであり、その代わりに彼は外観の全体を描いている。外観のデッサンには、窓が小さく壁面の多いロマネスク建築の特徴を残した佇まい、小さなゴシックの窓と薔薇窓、ルネサンスの連続アーチなど、同聖堂では様々な時代の意匠が調和的に存在している様子が描かれ (図2)、異なる意匠を認める寛容な精神が感じられる。様々な時代の建築意匠を許容する精神は、彼が意匠を担当した中央建築家協会 (Société centrale des Architectes) のメダルに版刻された「女神の頭から湧き出る様々な建築」に表現されており、彼の生涯の建築理念の一つである。

聖フランチェスコの死の2年後の1228年に着工されたこの聖堂はイタリア・ゴシック建築に分類されるが、側廊を持たない平面形式、高さを求めない幅の広い空間、緩やかなポインテッド・アーチ、交差リブ・ヴォールトの連続、開口が小さく、壁面を多く残し、フレスコ画で仕上げられた室内など、一般的なフランスやイギリスのゴシックの聖堂とは異なった様相であり、大変独創的である[19]。上堂と下堂の二階建てであり、これはプレロマネスク期、ゴシック期の司教用礼拝堂や宮廷礼拝堂などの小規模な礼拝堂に見られる形式である。二階建ての礼拝堂の好例としてパリのシテ島のサント=シャペル(Sainte-Chapelle, 1241/42-1248) が挙げられ、後に同シャペルはラブルーストと近しい間柄にあった建築家たちが修復を行うことになる[20]。

19世紀の芸術アカデミーが古典主義の規範として推奨した建築はギリシア、ローマの建築であり、ゴシック建築はその規範の対象外であり、サン・フランチェスコ聖堂はそのゴシックにおいても例外的な建築である。彼がその例外的な聖堂を精密に描き、色彩仕上げのフル・レンダリングを施したデッサンを残したことは興味深く、彼がこの聖堂に価値を見出し、情熱を持って探究していた様子を理解することができる。

図2：アンリ・ラブルースト、「サン・フランチェスコ聖堂、全体の眺め」、1825。

3－2．上堂内部のデッサン

上堂のデッサンではアーチ、ヴォールト、フレスコが精密に描かれ、色彩仕上げで美しく描写されたこのデッサンは芸術的な建築デッサンとして高く評価されている。フランチェスコ聖堂の一連のフレスコ画はルネサンス初期の画家ジョット・ディ・ボンドーネ(Giotto di Bondone, 1267-1337) が1239年に描いた作品であり、28場面の「聖フランチェスコの生涯(Storie di san Francesco)」は世界的にその価値が認められている[21]。ラブルーストはそれを几帳面に描き写していて、向かって左に描かれたフレスコ画は

「簡素な賛辞(L'omaggio del semplice)」の場面であり、アッシジの街の男がフランチェスコの足元に服を広げて敬意を払ったエピソードが描かれている。この聖堂のフレスコ画の全体に施された青には空や天空を感じさせる清々しさがあり、彼の描写にもそれが感じられる。

1825年の彼のデッサンでは向かって右側のようにフレスコ画が剥落しているが、現在は彼がデッサンを描いた19世紀前半より修復が進んだ状態である[22]。1997年9月26日に発生したウンブリア・マルケ地震ではサン・フランンチェスコ聖堂は大きな損傷を受けた。聖堂の天井は崩落し、ジョットのフレスコ画も剥落し、粉々に砕けた。その後修復が行われ、2000年にはほぼ元の姿に戻り、同年、ユネスコ世界遺産に登録された。

図3：アンリ・ラブルースト、「サン・フランチェスコ聖堂、上堂内部」、1825。

4．同聖堂の構造と意匠の関係性

4－1．控え壁と細い柱の束

彼の聖堂内部のデッサンでは、この聖堂の特徴でもあるロマネスク建築の様相を残した壁面と小さな窓、横架材の役割を果たしている幅の広い緩やかなポインテッド・アーチ、フレスコ画、リブの稜線に施された繊細な装飾芸術、色彩の施された細い柱の束などが緻密に描かれている。聖堂の平面図（図6）を参照すると、内部に露わされている細い柱の束は聖堂全体を支える構造体ではなく、全体の構造体は外部に見えている円筒状の堅固な控え壁であることが理解できる。円筒状の控え壁は珍しく、内部に空洞があり、その一部は階段室となっている。控え壁の中に階段を設ける設計はサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、パリ国立図書館と同様であり、両図書館では控え壁の集まる角部に管理用階段が設けられている。控え壁は風圧や地震力などの主な水平力を支え、同時に外観の意匠構成においても主要なリズムを形成するのであるが、この聖堂においてもこの円筒状の控え壁は外観の構成要素となっていて、それは彼のデッサンにも描かれている（図2）。

円筒状の控え壁の断面積の大きさに対して細い柱の束の断面積は小さく、細い柱の束はその細さからも水平力は負担しておらず、軸力もあまり大きくない荷重を支えているであろうことが推測される。したがって、細い柱の束は聖堂の内部を豊かにする意匠的な役割が大きいと判断される。しかしながら、ラブルーストのデッサン（図3）、天井のリブ･ヴォールトと細い柱の束が連続する様子（図4、図5）、詳細を後述する二重のクロス・アーチのリブの仕組みを勘案すると、細い柱の束は上部の石造天井の荷重を主に軸力として支える役割を果たしていることを理解することができた。同聖堂では構造の考え方が簡潔であり、それを目に見ることができ、同聖堂では構造の骨格がそのまま内部の意匠構成の基本線となっていて、簡潔で美しい佇まいは秀逸である。サン・フランチェスコ聖堂の控え壁と細い柱の束の関係は、ラブルーストのパリ国立図書館の大閲覧室に見られる堅固な石造の控え壁と内部の繊細な鉄構造の機構からなる「箱入れ構造」に近しいと言える。加えて、同聖堂の細い柱の束と外部の円筒状の控え壁は概ね繋がっているが、上部の幅の狭い通用の廊下では小さな通用の開口が設けられており、部分的に分離している。これもパリ国立図書館の大閲覧室の上部の控え壁に開けられた通用の小さな開口と同じ仕組みである。

図4：サン・フランチェスコ聖堂、上堂内部

図５：サン・フランチェスコ聖堂、上堂内部、細い柱の束と天井のリブ、控え壁に設けられた通用の小さな開口

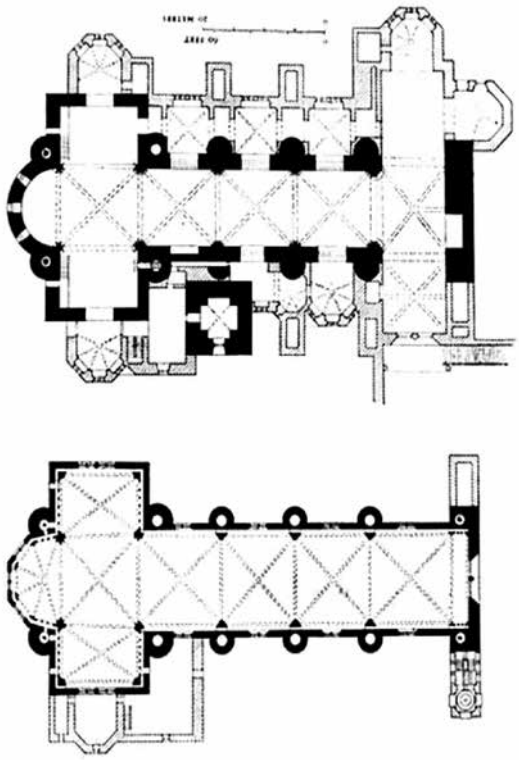

図６：上：サン・フランチェスコ聖堂下堂平面図。下：同上堂平面図。

４－２．二重のクロス・アーチのリブ

1997 年のウンブリア・マルケ地震では石造天井が崩落し、それにより屋根と天井の間の小屋の内部を見ることが可能となった（図７）。屋根を支える横架材が石造のリブ状のクロス・アーチであったことは驚きを持って知った。これは珍しい事例であり、ヨーロッパの教会堂は初期キリスト教、ロマネスク、ゴシック、ルネサンス以降も含め、時代を問わず､屋根架構は木造であることが一般的である。同聖堂では屋根と天井はそれぞれ別の架構であり、石造のリブ状のアーチとクロス・アーチであり、それらが二重に掛かっている。屋根のアーチとクロス・アーチは日本の木造建築の小屋組の梁と登り梁に当たる役割を果たし、ここでは母屋と棟に当たる材のみが木造であり、それ以外は石造であった。

資料を元に総合的に判断すると、屋根を形成するリブ上のクロス・アーチの荷重は、推力も含め、外部の堅固な控え壁に伝わり、天井を形成するクロス・リブ・ヴォールトの荷重は内部に見える控え壁の端部と細い柱の束に伝わっていることを理解することができる。内部では風圧の水平力を考慮する必要はなく、天井の軸力のみを受けるので、これを控え壁の端部と細い柱の束で支えることには合理性がある。これはパリ国立図書館の堅固な控え壁と細い鉄構造の機構、「箱入れ構造」に見られる水平力の分離と同様の関係である。屋根と天井のリブ状のアーチの断面の大きさに着目すると興味深く、屋根瓦と自重、水平力と比較的大きな荷重を支えている屋根のアーチは幅が太く、梁せいも大変高い。一方、石造天井のみを支えている天井のリブ状のアーチの断面は小さく、建造の自然な論理性がある。

加えて、この聖堂の石造の屋根架構と石造天井は火災から内部を守ることに有効であったように思われる。特にジョットのフレスコ画を守ることに効力を発揮したことであろう。中世盛期のヨーロッパは北方の民族の移動、十字軍の遠征、教皇の勢力と国王などの世俗政権の勢力との争いなど、戦乱の多い時代であった。アッシジでは 1202 年に近隣の街ペルージャとの戦いがあり、アッシジはこれに敗北している。天井の不燃化においては、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館では石膏、パリ国立図書館の天井ではセーヴル焼きの陶製であり、天井が不燃化されている。天井の不燃化は両図書館の貴重な書籍と内部の室内装飾芸術を火災から守ることに有効であったことであろう。19 世紀のパリではたびたび火災があり[23]、近年では 2019 年 4 月 15 日に起きたパリのノートルダム大聖堂（Cathédrale Notre-Dame de Paris, 1163-1230/1345）の火災が記憶に新しい。ノートルダム大聖堂の火災では身廊と側廊の上部の木造の屋根架構が全焼し、尖塔が焼け落ちた。この火災では石造天井が一部崩落し、熱と消火の放水により聖堂内部に被害もあったが、石造部の主要構造は概ね残された。

図７：サン・フランチェスコ聖堂、上堂、二重のリブ、クロス・アーチ

４－３．ジョットのフレスコ画に見られる細い独立柱

ラブルーストはこの聖堂のジョットのフレスコ画の建築物を描き写している（図８）。画面中央の三つのポインテッ

ド・アーチを持つ建築物は「ホノリウス３世の前の説教」（図10）に描かれているロッジアである。下の三つの建築物では左のものは「簡素な賛辞」（図９）の右側に描かれた建物に近しい。「簡素な賛辞」の中央に描かれた建物はサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会（Chiesa di Santa Maria sopra Minerva）であり、この教会のファサードは古代ローマの神殿、紀元前1世紀のアウグストゥス時代のミネルヴァ神殿（Tempio di Minerva）である。

アッシジの歴史は古く、原始の時代にウンブリア人と呼ばれる人々がこの地域に定住していた。紀元前450年からはエトルリアに占領され、エトルリアの都市となった。その後、アッシジは紀元前295年以降、ローマに占領され、ローマの都市となり、同教会のファサードはその時代に建造されたものである。サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会の隣に描かれたポポロの塔（Torre Del Popolo）は現在もその様子が変わっていない。聖フランチェスコやジョットが生きた13世紀のアッシジの市民が居住した街や建物の様子を今日に伝えている。建物の前方にアーケード空間が設けられおり、どれも細い独立柱によって支えられている。彼がデッサンに描いた建物では、大きな水平力は後方に控える壁面の多い堅固なボリュームが負担し、アーケードをなす細い独立柱は水平力をあまり負担していない。ラブルーストの細い独立柱とそれを可能にする構造の仕組みへの着目は、早くも1825年、彼が24才の時に描いたデッサンに現れていることを理解することができる。

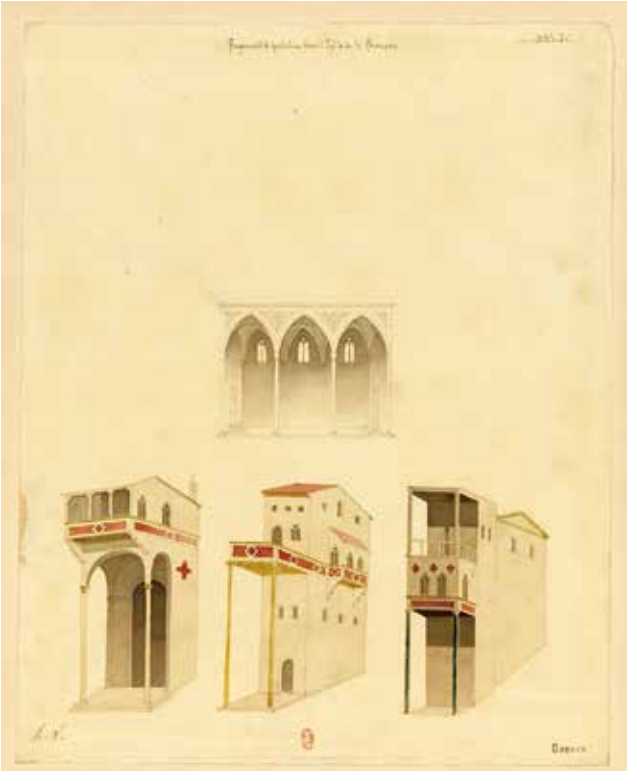

図８：アンリ・ラブルースト、「サン・フランチェスコ聖堂、フレスコの詳細」、1825。

図9：ジョット・ディ・ボンドーネ、「簡素な賛辞」、1239。

図10：ジョット・ディ・ボンドーネ、「ホノリウス３世の前の説教」、1239。

５．まとめ

ラブルーストはローマとフィレンツェでも多くのデッサンを残しているのであるが、彼が訪れたイタリアの都市の分析からは、その第一の特徴は古代の都市であり、エトルリアの建築と地下墳墓、南イタリアのギリシア建築とポンペイの都市遺跡の探究に彼の個性を見ることができた。ラブルーストのイタリア建築に対する視座の一つは「古代」であったと言える。彼の「古代」への視座は1828年のパエストゥムの研究として偉大な成果を生むのであるが、イタリア時代の５年間全体に渡り、「古代」に着目していたことが明らかになった。第二の特徴はローマから離れた遠方の地域を旅したことであり、南はイタリア南端のシチリア、東はアドリア海沿岸マルケ州の現在でもあまり交通の便が良くない小都市を訪れ、東端のヴェネチアに到達している。第三の特徴はトスカーナ地方とウンブリア地方の山岳都市のエトルリアの遺跡と中世イタリアの建築であった。

一方、サン・フランチェスコ聖堂のデッサンの分析からは、彼が聖堂内部の部分詳細やジョットのフレスコ画の建築物を描いており、主に細い柱を持つ空間と建物を描いていたことが明らかになった。彼の細い柱への探究はイタリア留学時代の1825年に既に始まっていたことは確かなこ

ととなった。同聖堂の特徴とデッサンの参照からは、後に代表作品の二つの図書館に見られる「箱入れ構造」と水平力の分離と近しい考え方がこの聖堂にも見られることが理解でき、ここにも発見があった。この聖堂の控え壁に設けられた小さな開口はパリ国立図書館の大閲覧室のそれと同じ発想であり、ラブルーストの二つの図書館の研究により同聖堂の小さな開口に気が付くことができた。

加えて、同聖堂の小屋の内部の二重のリブ状のクロス・アーチの仕組みを確認することができたことは成果であった。この仕組みには知恵があり、感銘を受けた。これが構造と不燃化の実利と内部の意匠的効果を兼ね備えていることは鮮やかであった。同聖堂の細い柱の束はクロス・リブ・ヴォールトの石造天井を支えていて、この天井を支える薄く軽やかな仕組みと二重のリブのクロス・アーチの秘密により成立することを我々に仄めかしているかのようである。本稿で述べた諸点をまとめると、細い柱と石造天井の関係に見られる自然な建造の論理、建築と芸術の意匠との関係、絵画に描かれた建築がラブルーストの同聖堂への眼差しとして、彼のデッサンの描写に現れていると結論付けられるのである。

謝辞

本研究はJSPS科学研究費補助金（科研費）の助成を受けたものである。基盤研究（C）、17K06749、『パリ国立図書館における分離構造と細い独立柱の空間の源流』。This research was supported by JSPS KAKENHI, Grant Number 17K06749, Grant-in-Aid for Scientific Reseach（C）. 2017年８月、2018年８月、2019年３月、2019年８月に行った現地調査、研究活動では様々な方々、研究機関から多くの支援と協力を賜りました。パリでは建築家のブリューノ・ゴーダン（Bruno Gaudin）氏とヴィルジニー・ブレガル（Virginie Brégal）氏、修復建築家のジャン＝フランソワ・ラノー（Jean-François Lagneau）氏とパトリス・ジラール（Patrice Girard）氏をはじめに、フランス国立図書館、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の方々、パリ国際大学都市スイス館の方々、アテネでは古代アゴラ博物館、イタリアでは遺跡や教会の方々に心から感謝とお礼を申し上げます。

参考文献

アンリ・ラブルースト関連：Saddy, Pierre., *Henri Labrouste. Architecte, 1801-1875*, Caisse Nationale des Monuments Historiques et des Sites, Paris, 1977. Drexler, Arthur (ed.), *The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts,* The Museum of Modern Art, New York, M.I.T. Press, Cambridge, Massachusetts, 1977. Middleton, Robin (ed.), *The Beaux-Arts and nineteenth-century French architecture,* Thames and Hudson, London, 1982. Zanten, David Van, *Designing Paris : Architecture of Duban, Labrouste, Duc and Vaudoyer,* MIT Press, Cambridge, Massachusetts London, 1987. Leniaud, Jean-Michel (dir.), *Des palais pour les livres, Labrouste, Sainte-Geneviève et les bibliothèques,* Maisonneuve & Larose, Paris, 2002. coll., Dubbini, Renzo(cura), *Henri Labrouste 1801-1875,* Electa, Milano, 2002. coll., Bélier. Corinne, Barry Bergdoll, Marc le Cœur, *Labrouste (1801-1875), architecte : La structure mise en lumière,* Cité de l'architecture et du Patrimmoine, The Museum of Modern Art, Bibliothèque nationale de France, Nicolas Chaudun, Paris, 2013. ピエール・サディ、『建築家、アンリ・ラブルースト』、1977、丹羽和彦翻訳、福田晴虔編集、翻訳脚注協力白鳥洋子、中央公論美術出版、2014。

ヴィラ・メディチ関連：Remy, Pierre-Jean., *Villa Médicis: Journal de Rome,* Odile Jacob, Paris, 2008. Fernandez, Dominique., Ferrante Ferranti, *Villa Médicis,* Philippe Rey, Paris, 2010. Fossier, François., *Le séjour des grands prix de Rome à la villa Médicis: Une récompence douce-amère,* L'Harmattan, Paris, 2018.

19世紀フランスの建築関連：三宅理一、『ボザール：その栄光と歴史』、鹿島出版会、東京、1982。ロビン・ミドルトン、デイヴィッド・ワトキン、『新古典主義・19世紀建築２』、土居義岳翻訳、図説世界建築史14、本の友社、2002。

ゴシック建築関連：ルイ・グロデッキ、『ゴシック建築』、前川道郎、黒岩俊介翻訳、図説世界建築史８、本の友社、1997。

サン・フランチェスコ聖堂関連：Lunghi, Elvio., *La basilique de Sant-François à Assise,* Scala, Firenze, 2016, original ed., 1998. Canali, Bonechi., *The Basilica of San Francesco in Assisi,* Ferruccio Canali, Firenze, 2000. Dozzini, Bruno., *Giotto, La legend franciscaine dans la basilique d' Assise,* Minerva, Assisi, 2007, 2011, 2015.

coll., *La Basilica di San Francesco ad Assisi, The Basilica of Saint Francis in Assisi,* Franco Cosimo Panini, Modena, 2015. *Assisi, il Restauro impossibile,* ISCR, 2015. Vicenzi, Herausgegeben von Alessandro(ed.), *La basilique de Sant-François à Assise,* Franco Cosimo Panini, Modena, 2016. Ricci, Renato., Leonardo Marini, *"765 giorni" La basilica di San Francesco di Assisi,* Ministero per Beni e le Attività Culturali, 2016. M. G. Angelini, V. Baiocchi, D. Costantino, F. Garzia, "Scan to BIM for 3D Reconstruction of the Papal Basilica of Saint Francis in Assisi in Italy", University of Rome, *The International Archives of the Photogrammetry, Remote Sensing and Spatial Information Sciences,* Volume XLII-5/W1, 2017. Geomatics & Restoration, Conservation of Cultural Heritage in the Digital Era, Florence, 2017.

図版出典

図１，２，３，８：BNP.，図４，５，９，10：2019年８月筆者撮影，図６：M. G. Angelini（2017），図７：*Assisi*（2015），Wikipedia.

註

1 アンリ・ラブルーストに関する主要文献は参考文献に記載した。アンリ・ラブルーストに関する筆者の論文：「アンリ・ラブルーストの青年期と師匠たち：18世紀の革新性の継承」、名古屋造形大学紀要、第18号、pp. 59-74、2012。「アンリ・ラブルーストに関する建築史的研究：パエストゥムの神殿の復元と論争に見られる分離構造の源流」、博士論文東京大学大学院工学研究

科博士課程、2015。「アンリ・ラブルーストのエコール・デ・ボザール時代：コンクール・デミュラシヨンにおける 18 世紀の啓蒙性と近代建築の予兆」、長岡造形大学研究紀要、第 14 号、pp.6-16、2017。「フランス国立図書館の端緒：シテ宮サント＝シャペルの宝物庫と 19 世紀の建築」、長岡造形大学研究紀要、第 15 号、pp.13-21、2018。「パリ国立図書館の装飾芸術の主題に関する考察：大閲覧室のメダイヨンに見られる人文学の叡智」、長岡造形大学研究紀要、第 16 号、pp.14-21、2019。「中世シテ宮殿のグランド・サルにおける独立柱の空間：その空間の消失と 19 世紀の再発見」、長岡造形大学研究紀要、第 17 号、pp.13-20、2020。

2 白鳥（2020）.

3 旧シテ宮殿（Palais de la Cité）のグランド・サル（Grande Salle, Grand'Salle）はパレ・ド・ジュスティス（Palais de justice, 正義宮、司法宮）のサル・デ・パ・ペルデュ（Salle des pas-perdus）となり、19 世紀初頭に現在の姿となった。白鳥（2020），pp.14-16.

4 Labrouste, Henri., Journal du voyage de Henri Labrouste de Paris à Rome, *Labrouste*（1953），p.15.

5 *Labrouste*（1953），p.18.

6 ヴィラ・メディチに関する主要著書を参考文献に記載した。

7 一般的な事項の解説は以下の辞典辞書を参照した。『建築大辞典』、第２版、彰国社、1993。柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦、『広辞苑』、第六版、新村出編、岩波書店、2008。『ブリニカタ国際大百科事典』、2010。*Encyclopédie Larousse en ligne. Encyclopædia Universalis.*

フェルディナンド１世・デ・メディチ（Ferdinando I de' Medici, 1549-1609）：メディチ家第３代トスカーナ大公（在位：1587-1609）。初代トスカーナ大公、コジモ１世（Cosimo I de' Medici, 1519-1574）の５男。コジモ１世はメディチ家隆盛の基礎、フィレンツェ共和国にけるメディチ家支配を確立したコジモ・デ・メディチ（Cosimo de' Medici, 1389-1464）とは別の人物である。

8 Fernandez（2010），P.31.

9 アンリ・ラブルースト、「ヴィラ・メディチ」、1825、ペン、茶色の淡彩、「H. Labrouste, Rome, 1825」の記載、14.1㎝× 20.2㎝。

10 氏名、生没年、ローマ大賞受賞年、在ローマ・フランス・アカデミー滞在期間の順。

11 氏名、生没年、在職期間の順。

12 ロジェ＝アルマン・ウィジェール（Roger-Armand Weigert, 1907-1986）は版画とタペストリーを中心とする美術史家。パリ国立図書館の学芸員でもあり、ラブルーストのデッサンの整理分類を行った。Weigert はオランダで見られる姓であり、オランダ語の発音ではワイガートとなる。ここではフランス語の発音で表記した。

13 ウィジェールが作成した目録から筆者が算出した。

14 ラブルーストのデッサンには年号の記載のあるものとないものがあり、記載のあるものを記載した。

15 アルファベット順の記載。

16 Mazois, François., *Les Ruines de Pompei,* Firmin Didot, 1824-1838, Paris.

17 1828 年のアンリ・ラブルーストのパエストゥムの神殿の研究と復元に関しては、白鳥（2015）に詳細を記載した。

18 ラブルーストのパリ国立図書館におけるメダイヨンの用法と装飾芸術の主題については、白鳥（2019）に詳細を記載した。

19 Grodecki（1997），p.182-183.

20 サント＝シャペル、シャルトの宝物庫と 19 世紀の建築家たちとの関係については白鳥（2018）に詳細を述べた。

21 ジョットの「聖フランチェスコの生涯」に関する参考文献：Lunghi, Elvio., *La basilique de Sant-François à Assise,* Scala, Firenze, 2016, original ed., 1998. Dozzini, Bruno., *Giotto, La legend franciscaine dans la basilique d' Assise,* Minerva, Assisi, 2007, 2011, 2015. coll., *La Basilica di San Francesco ad Assisi,* The Basilica of Saint Francis in Assisi, Franco Cosimo Panini, Modena, 2015.

22 2019 年８月に現地確認を行なった。

23 例として旧シテ宮殿のグランド・サルの火災による焼失が挙げられ、それについては白鳥（2000）に記載した。